

プリムラ・マラコイデス

グリーンルーツ 担当 金澤大樹

プリムラ・マラコイデスについて

成り立ち

中国の雲南省が原産のマラコイデスは1900年初冬にヨーロッパに導入され、育種が開始された。日本ではその数年後もたらされ宮廷園芸植物の仲間入りをしたようだ。通常品種を栽培している中に突然変異が現れ、それが親となり多数の品種が育成された。近年いろいろな花色が出てきたが、突然変異が得られた当初は早晩性と白い粉の有無が重要な形質とされた。

日本では昭和30年代までが過去の品種の全盛期で、40年代以降は嗜好の変化とポリアンサの急激な生産量増加により集落の傾向にあったが、50年代に入り富士ざくらの人気で再び人気が復活してきた。生産面で、栽培携帯などからシクラメンの後作としてマラコイデスの有利さが見直され、消費者には装飾効果や季節感などが受け入れられた。

その富士ざくらの特徴はヒヤシンス咲きと呼ばれる大花房性があり、この仲間には富士おとめ、富士の夢、富士の誉、富士の曙へと巨大輪性を増しながら受け継がれ、花色の幅を広げて発展してきた。当時は、国際的にみても非常に完成度が高い園芸植物だった。

その後、沢山花が密集して咲くヒヤシンス咲きは、生産現場に於いて、株内の風通しが悪く、生産性の問題で衰退した。そのような状況の中で、ヒヤシンス咲と花房ができないうぐいす系統の中間種とすることで矢祭園芸では【ピュア】という品種を育種、現在まで系統維持をしている。また、富士系統から派生した葉っぱに香りのある品種である【メローシャワーシリーズ】などが育成された。派生で、ダブルライラックやダブルネオンローズなどの品種も誕生した。

また、第一園芸佐藤氏が育成に関わった八重咲き4倍体の品種【デュエット】が種苗事業撤退後、イギリスの種子販売会社で販売されたものを偶然矢祭園芸が購入、系統選抜を行い色幅をつけて育種していた所に、その8年後に佐藤氏が当園に来た時になくなった品種をであったという偶然も非常に面白い。

早晩性と花芽分化

マラコイデスは通常9°C以下の気温を感じると花芽分化を開始する。早生咲き品種程、この温度が高い。マラコイデスの場合早生咲きの品種を選抜していくと、耐寒性が無くなってしまいう傾向にある。なぜなら、選抜過程で、耐寒性まで十分に試験をした上で選抜しないためかと思われる。

マラコイデスの早晩性は倍数性にも由来する。矢祭園芸品種選抜のデュエットと言う品種は4倍体の品種で、2倍体の品種と比べて細胞の中の遺伝子量が2倍になっている。その為、利用するエネルギーも2倍であるため生育が緩慢だ。結果として最終製品になるまでの時間が2倍体の品種より遅くなり、結果として晩生の品種となってしまう。

右の写真は花芽分化を確認するために切ったところです。これらを顕微鏡で見て、花芽ができたかどうかを確認します。



ピュア



上:シャワーピンク
右:ロマンティックピンク

ピュア

矢祭園芸で品種改良されたヒヤシンス咲きより花が密集せず、うぐいすより花が多いタイプ。

花色は多く、蛇の目咲きからピンク系のシェードで10種類程度



デュエット



佐藤和規育成、金澤美浩選抜再育種の4倍体のマラコイデス。花軸が太く、花が八重咲きが特徴。

4倍体であるが故に晩生の商品。寒さには強いようで、温室内気温がマイナスになり葉っぱが凍っても復活した。常時マイナスでは障害が起きるがそこそこの低温であれば問題がない。色目は豊富。



メローシャワーシリーズ

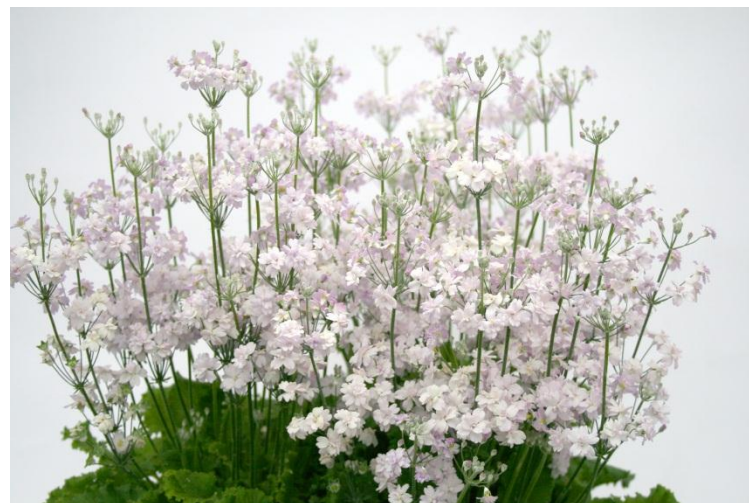


葉っぱにメロンの香りが有る品種。薄藤色のメローシャワー、ピンク色のメローシャワードリームがある。新色でブルー&ホワイトという変わった品種が今後追加される予定。

下:メローシャワードリーム

左:ブルー&ホワイト

左下:メローシャワー



ウィンティ

ライムグリーンを中心とした品種群。現在4色で展開中。グリーンルーツでは全色の鉢物での販売が可能。品種はサントリーフラワーズが販売元となっている。サクラとライムグリーンは大きくなる品種で、ネオンローズとダブルライラックは背丈が同じくらい。

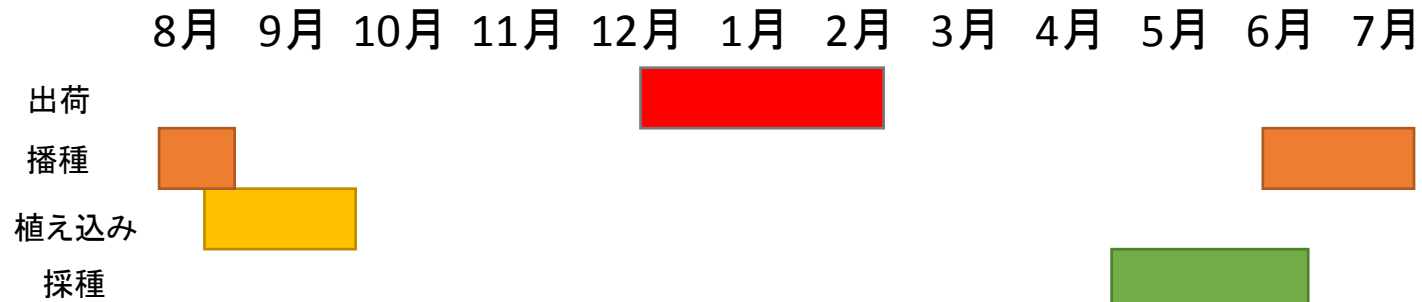


手乗りメラコ

手に乗るサイズのマラコイデス。以前はポシェットという品種もあったが、現在は生産量は激減している。
矢祭園芸育成の品種で、この可愛らしさが消費者に受けているようだ。
色目は豊富。



生産スケジュール



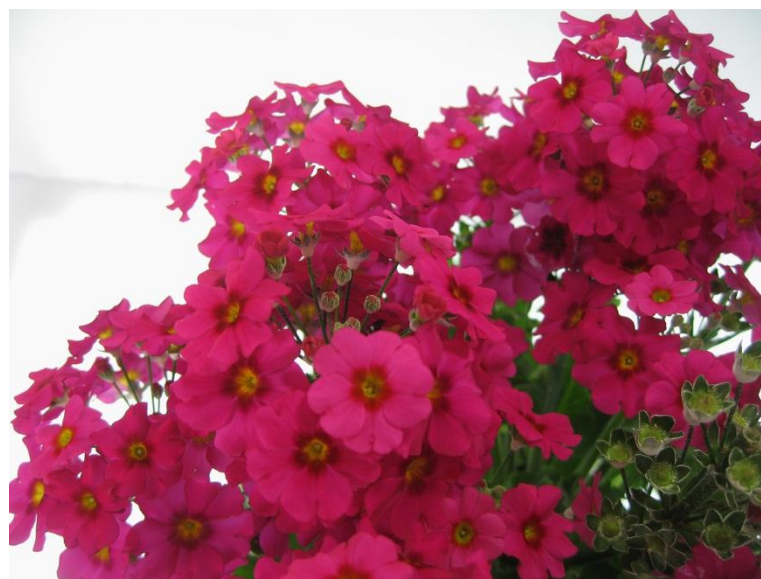
- 播種後植え込みまで約2か月。
- 暑さには弱い。
- 種は1ml約3000~5000粒。
- 12月下旬~花苗出荷。鉢物は1月10日位から。

販売時期

プリムラ・マラコイデスの販売時期が年々前倒しになってきている。早生系の品種も出荷されている。メローシャワーシリーズは花が比較的早く12月20日位には花芽が上がってくる。ウィンティシリーズではライムグリーンとサクラの開花が1月に入ってから、その他2品種は年内に開花する。手乗りメラコやデュエットシリーズは生育が緩慢なため1月下旬~の出荷になる。しかしながら手乗りメラコは2月商材として非常に引き合いが強い。ただ、生産ロス率が高いため効率的生産は望めない。ピュアは昔ながらのマラコイデスであるため、12月末から1月中旬にかけて開花する。

ヒヤシンス咲きマラコイデスが全盛だった時期は、年越しはマラコイデスということが多かったという。それほど昔は生活に溶け込んでいたのが分かる。

マラコイデスはカビに弱いいため、風通しの良い場所での販売管理が必要になる。花茎にカビが生えるとその株自体がダメになってしまうこともある。



マラコイデスの花後の管理

マラコイデスの花の咲き方は中心の花が立ち上がり、ある程度咲いた段階で脇芽が上がってくる。普通のマラコイデスは花が3段目位咲いた段階で一番下の段の花が散ってくる。ウィンティのライムグリーンはそうではないが。ある程度段が進んだ状態で、中心の芽を折ってしまっても問題ない。その結果、わきの花の成長が促進され、どんどん花が上がってくる。二周り大きな鉢に植え込んで楽しむと良い。

マラコイデスはカビに弱く、花茎がかびてしまうと、株全体が汚染されてしまうことがある。これが原因でヒヤシンス咲きのマラコイデスは衰退してしまったと言われている。

乾燥には極端に弱いということはないが、水は好きなため、水切れが起きると花の天辺がお辞儀をしたりする。また、葉っぱもてかりを増して、全体的にク垂れてくる。矢祭園芸の土であれば水を耐えれば戻ることもある。

マラコイデスの管理方法

寒さ: 5°C目安に土が凍らない様に管理すると、きれいに楽しめる。

寒さには強い

暑さ: 高温に弱いいため日本では一年草扱い。

病気: プシウム菌による根の病気に注意。その際はオキシドールを灌注。

用土: 水はけの良い土

植え方: 特に注意することはない。店頭で花付きで販売されているものは根が良く回っているので水管理だけ注意が必要。楽したい場合は植え替えてしまうのが良い。

肥料: プロミックや緩効性肥料がお勧め

植える場所: 北風の当たらない場所で、1°C以下にならない場所。3月以降非常に良く花を咲かせる。

植え替え: 秋~春

店頭: 雨風が当たらない場所で管理。寒さには程々強いが、冷たい風でしおれることがある。カビないように注意を払う必要がある。